死海文書の愛（AI）だから。

永遠の文芸部

死海文書の愛(AI)だから。

オープニング

　狭いシェルターにガスが充満していく。無数の女たちがキチガイじみた叫び声をあげてもがいている。女子高生、女子中学生、社会人。すかした奴らがみんな、醜く死んでいく。
　しゃがみこむ。ナツカが血走った目をしながら壁に両手をつく。他の女たちがナツカの体にしがみつく。誰かがナツカの髪の毛を引っ張った。ナツカが叫ぶ。
　裸の女たちは徐々に力を失い、叫び声は小さくなり蛆虫のように動くだけになっていく。
　やがてみんな、機能が停止する。
　俺は彼女たちの様子を見ながら、ぼんやりとナツカのことを考えていた。例えばナツカは可愛くて、例えばナツカは胸が大きくて、例えばナツカはフェラが上手で、例えばナツカは俺の事しか知らなかった。
　フェラが下手な女に生きる価値はないと思っている。それは別に不道徳でもないし、そもそも割りとどうでも良い事だ。兎にも角にもナツカには生きる価値があったのだ。
　全員の機能が停止した。裸の女の屍。
　だから、なんだというのか。
　トイレに入る。便座に座る。クソをした。俺はクソをしながら、泣いた。

第一話

１

　ナツカは引きこもりだった。なんか色々あって、とにかく引きこもっていた。彼女は可愛い高校二年生だった。そう可愛かった。それ以上は何も望まない。デブでブスな女なんて腐った子宮が作り出した失敗作だ。
　俺はナツカに手を差し伸べた。ナツカはマクドナルドに行った事すらなかった。
　ナツカを色々な所に連れて行った。マクドナルド、ケンタッキー、ロッテリア、ガスト、映画館、水族館、遊園地、ラブホテル。乱交パーティ。
　何も知らないナツカにとって、俺は全てだった。世界というものが俺だった。つまり俺は敵なしだった。誰かがナツカに近寄らない限りナツカは永遠に俺のもの。
　朝起きると股間がムズムズする。目を開けるとナツカと目が合う。ナツカは俺に添い寝しながら股間をしごいている。そういう素晴らしい日常が幸せだった。貯金が三百万円ある事なんてどうでもよかった。
　やがて俺は射精する。ナツカは手に付いた俺の精子を舐めて笑う。まるで奴隷だ。ロボットだ。だから良い。女はロボットで良い。
　ナツカは黒髪のロングヘアーで顔が小さくて色白で胸はＣカップで足が細くて長くてオシャレで話が面白くて、とにかく俺を愛していた。俺はナツカの顔と体を愛していた。しょうがない。悪いけど、そういうもんだ。俺は誰も信じないし愛さない。
　ただ、申し訳ないとは思っていた。だから俺はナツカを人に返そうと思った。ちゃんとした人間にして、もっと素敵な、いや素敵というか普通の人に渡すべきだと考えた。
「ナツカ」
「なぁに？」
　ナツカは俺の固い棒をしごきながら笑顔を見せる。最高の笑顔。それこそ無表情。

「税金はどうしてこんなに高いんだ？」
「知らない」
「どうしてみんな、嘘をつく？」
「知らない」
「なんでみんな、親のスネかじって生きてるんだ？」
「知らない」
「お前は何も知らないのか」
「知ろうとしないから」
「なるほど」
「知ったところで」
「うん」
「怒ったところで」
「うん」
「つまらない」
「うん」
　ナツカは本当に良い匂いがする。セックスの道具としてこれ以上ないほどに、蠱惑的だ。十七歳の肌は綺麗だしハリがあっていい。この前二十七歳の女とセックスしたが、ダメだった。こんなもんかと驚いてしまう。あぁ、儚いなとつまらない気持ちになる。
「ナツカ」
「うん？」
「もう少し、まともな男と付き合ったらどうだ？」
「やだ」
「なんで」
「貴方が全て」
「これからどうする？」
「何も」
「何も？」
「何も考えてないよ。別に。淡々と過ごすだけ。貴方と一緒に」
「面白くないよ」
「うん？」
「なんかもう、どうでもいいんだ。税金は高いし、俺にはお前しかいないし、何も面白くないし、なぁ、人生なんて、もういいだろ」
「私はずっと生きていたいな」
「ナツカ」
「なぁに？」
「キスしてよ」
　ナツカは俺の首に両手をまわしてキスをしてくれた。舌が入り込んでくる。
　そして勃起したアソコをまたしごいてくれる。やがて射精する。
　だからなんだ。俺はナツカが分からない。ずっと生きたいと思うナツカが分からない。
　俺は人間を見てみたい。空っぽじゃない人間の心理ってもんを知りたくてしょうがない。
　だから試しに人を殺そうと思いたった。まずはアリサ。あいつを殺してやろう。

2

　アリサは二十四歳で、実家ぐらしで、フリーターだった。月収六万円。家族との仲は良好。お父さんが大好きな甘えっ子。要するにイカれたクズだった。アリサとニートの違いはなんだ？　遊ぶ金を自分で稼いでいるのか、いないのか。その違いしかないじゃないか。でも、こういう奴らは大勢いる。高い税金を払う苦しみも、自分一人で生きていく辛さも何も知らない愚か者。というかそういう苦労を知ろうともしない。逃げている。
　それは別に良い。俺には関係ない。でも、こういう奴らがでかい顔して社会人ぶっている事が問題なのだ。
　アリサは午後八時二〇分に、セイコーマートの前を通る。そして狭い路地に入る。
　俺はセイコーマートの近くでアリサを見つけ、予定通りの路地で待ち伏せした。
　アリサがやってくる。黒色のワンピース。
「よう」
「わっ」
　アリサは右手に袋を持っていた。中にコーラとケーキが入っている。
「ビックリするじゃん。どうしたのこんな所で」
　俺はナイフを振り上げてアリサの脳天に突き刺した。うまく刺さらなかった。次は心臓めがけてナイフを突き刺す。今度はうまくいった。力強い手応え。
　アリサは悲鳴をあげた。俺はアリサを突き飛ばした。尻もちをついた彼女に馬乗りになって、ナイフでめった刺しにした。
　アリサは吠えていた。死ぬほど吠えていた。ていうか死んだ。
　人生ってそんなに焦がれるものなのか。いや、お前に恋い焦がれる権利なんてありゃしない。親のスネかじって、いい年こいて自立もせず適当に生きてるだけの人間じゃないか。世の中には一人暮らしで、毎日もやしを食って生きている人間が大勢いるんだぞ。日本人は貧乏だ。みんな、本当に苦労している。
　それなのに、どうしてお前は親に守られているのだ。コンビニでコーラやケーキを買うだけでも躊躇する奴は沢山いる。お前は貯金という言葉を知らないのか。どうせスマホのゲームにバカみたいに課金してもいるんだろう。
　自分に生きている価値があるとでも思っているのだろうか？
　アリサの呼吸がとまる。ワンピースをめくりパンツを脱がせたが、性欲は湧いてこなかった。だからとりあえず胸を何度か揉んでおいた。

3

　アリサの家にアリサがやってきた。アリサは床の上で正座している。データのロード中。はい終了。アリサが口を開く。
「さーてと。ケーキ、ケーキ！　あれ？　私のケーキは？」
　アリサはケーキを探して首をめぐらす。俺と目が合う。
「あれ？　ユウトじゃん。なんでここに居るの？　ていうか、なんで裸なの？」
　俺はアリサを抱きしめる。キスをする。アリサは熱い吐息をもらす。
「そっか。エッチしてたんだ」
「うん」
「ユウト」
「うん？」
「好きだよ」

「そうか。ねぇアリサ」
「なぁに？」
「今度、ナツカと一緒に、三人でセックスしよう」
「いいよ」
　まだ分からない。不安でたまらない。
　ねぇナツカ。
　俺は、どっちなんだ？

第二話

1

　学校の屋上を見上げていた。女子生徒が屋上に立っている。心臓の鼓動が早くなる。こういうシチュエーションは大好きだ。
　予定通り、女子生徒が飛び降りる。ぐしゃ！
　彼女はいじめられていた。犬のクソを口に突っ込まれたり、レイプされて中出しされたり、お金を盗まれたり、頭にボールペンを突き刺されたり、ついでに妹もレイプされたり、集団リンチされたり。日本ではこういう悪事をいじめと言う。むしろいじめかどうかも判断つきかねる。
　彼女は再生不可能だった。彼女のデータは彼女の中にある。
　後ろから誰かに肩を叩かれた。
「なぁユウト」
　振り返る。知った顔。ニキビ面の汚い男。
「お前は楽でいいよな」
「まぁな」
「あの子、名前何ていうんだっけ」
「覚えてない」
「そっか」
「うん」
「なぁユウト」
「なんだよ」
「ナツカ、一日貸してくんない？」
「ダメ」
「どうして？」
「ナツカは俺のもの」
「お前さ」
「うん」
「やっぱ、頭おかしいよ」
「そうかもしれない」
　ニキビ野郎は小さく笑う。
「間違いないよ。お前は欠落品だ」
　本当に、そうだろうか？

　自分の家に帰る。エプロン姿のナツカが料理をしている。今日はオムライス。
「ナツカ」
「どうしたの？」
「また、人が死んだよ」
「ふぅん」
「俺は、大丈夫かな？」
「私は信じてるから」
「うん。そうだね。大丈夫。俺は正常だ」
　ナツカが皿とコップをテーブルに並べる。狭いマンションの一室だけど、確かな幸せが充満していた。でも時々怖くなる。虚しくなる。
「ねぇナツカ。これは真面目な話なんだけど、セックスでしか幸せを感じられない恐怖ってもんが、お前に分かるか？」
「分からない。分かる訳ない。愛って言葉知ってる？」
「ちゃんとインプットされてるよ。俺だって昔は、それなりに熱かった。でもさ、最近はもうダメだ。何をしても面白くない。何もやりたくない。無だ。ありきたりな言葉だけど、無なんだよ。ナツカ。俺にとって君は、道具なんだよ」
「正直な人って好きだよ」
「だってさ、女とセックスする事でしか幸せを感じられないんだよ。お前にオムライスを作ってもらっても、それがどうしたんだとしか思えない。ねぇ、怖いよ。ナツカ。俺は何もかもが怖いんだよ」
「私がいるよ」
「けっきょく、お前がいてもダメだった。だからこそ俺は自分を信じられる。自分はやっぱり、そうなんだって」
「そういうもん？」
「ピンとこないか。でもね、だから結局寝るんだ。ゲームをするんだ。それ以上の未来と欲望はもう訪れない。ただ安らかに、淡々と、過ぎていく。何もかも」
「それでいいじゃん」
「イヤだよ。怖いよ。ただ寝て起きてセックスする日々の繰り返しで、無表情にぼんやり過ごしていく人生は、死んでいる事と何が違うっていうんだよ？」
「分からない。分からないよ、ユウト」
「眠いんだ。とにかく眠い。毎日眠いんだ。本当に眠くてさ、もう、座っている事も苦痛なんだ」
「ユウト？」
「ナツカ。俺はお前が羨ましい。それと同時に、俺自身もナツカなのかなって思う事もある」
「え？」
「うん？」
「違うの？」
「そう思ってる」
「ユウト」
「なに？」
「私、ユウトがちょっと、怖くなってきた」

3

　学校の屋上に立ってみた。どう考えても無理だった。飛び降り？　冗談じゃない。この屋上から飛び降りた彼女の神経が理解できない。
　それにしても眠い。本当に。心の底から。まぶたが重い。
　ナツカと出会うまで、俺はセックスに恋い焦がれていた。それさえあれば良いと思っていた。でもダメなんだ。それだけじゃダメなんだ。
　あぁ、眠い。
　やっぱり今日は帰って眠ろう。それだけが至福の時間。
　頭痛。この痛みはなんだろうか。
　嫌な予感。
　ハッキング。ナツカ。もしかして。

第三話

1

　目を開ける。俺は知らない部屋で正座していた。目の前に女がいる。
　誰だろう？　そう思うと同時に、大量の記憶が頭の中に流れ込んでくる。
　全ては簡単な計算式で出来ている。
　ナツカ。俺の恋人。俺は、ナツカを愛している。
「おはようユウト」
「おはようナツカ」
　ナツカは裸だった。俺は当たり前の行動を取る。両手を伸ばし、胸を揉む。ナツカが微笑み、自分の股間を指さす。
「新しいの買ってきて、さっそく取り付けたの。試してみる？」
　全ては簡単な計算式で出来ている。もちろん俺は頷く。セックスする日々は決して死ではない。

2

　明白だった。俺は屋上から飛び降りた彼女ではなく、アリサだった。俺とアリサは全く同じだった。違うのは記憶だけ。
　俺の股間にはペニスを取り付ける事が出来るし、もちろん女を取り付ける事も可能だ。ある意味それこそ死と同列ではないだろうか。
　でも、俺はそんな事をいちいち気にしたりはしない。そんなプログラムは埋め込まれていない。
　だけど、以前の俺は悩んでいた。多分それは、人類が恐れていた思考なのだろう。
　柔軟なプログラム。それを可能にするのはやはり人間の脳みそ。つまり、そういう事だったのか？
　ナツカに覆いかぶさって自分を出し入れする。幸福だった。人生は満ち足りている。
　そういえば俺は……。
　何が怖かったんだっけ？

シェルターの中で女たちが死んでいく姿が、たまに脳裏をよぎる。
最近、やっと気がついた。
あれは確かに夢だけど、ただの夢ではない。
俺はあんな風に人を殺す事を望んでいる。もちろんそれはなんとなく人を殺したいとかそういう理由じゃなくて、憧れだった。
人間らしさ。
俺はそれが欲しかった。
人間を憎む、その力強さが欲しかった。

今日も俺は、ベルトコンベアの上を進んでいく。俺では無い俺が、大量に。